

平成25年度第1回千葉県立博物館協議会 議事録要旨

日 時 : 平成25年7月24日(水) 13時30分～16時15分

会 場 : 千葉県立中央博物館 会議室

出席者 : 委 員 — 反町委員 鵜澤委員 水島委員 大森委員 西田委員 岡本委員
小野委員(議長) 齊藤委員 常光委員
博 物 館 — 中里美術館長 堀田中央博物館長 鈴木現代産業科学館長 太田
関宿城博物館長 関口房総のむら館長
文化財課 — 萩原学芸振興室長 植野副主幹

【会議次第】

1 報告事項

- ・平成24年度の実績と平成25年度の計画

2 協議事項

- ・県民が学べる場としての博物館の新たな役割と新たな手法について
(研究成果を周知する方法について)

3 その他

【議事概要】

1 報告事項

(各館が平成24年度の実績と平成25年度の計画を説明)

議長：各館からの報告について、質疑を受ける。

委員A：中央博物館においては、分館海の博物館は当初より分館として位置づけられていたが、大利根分館と大多喜城分館については、元々単独館であった県立博物館2館が後に分館化されたものである。後から分館となった2館の運営、特に展示会の企画等においては、各分館の独自性が保たれているのか。

中央博物館長：各分館における展示会等の諸事業は、それぞれの館において単独館時代と同様に各(分)館の専門性や立地を踏まえて企画している。また、事業の実施に際しては、本館・分館間の連絡を密にし、必要な資料の確保や要員の派遣など、本館が適宜、分館を支援する体制をとっている。

委員A：分館化による(元単独)館の衰退を危惧しての発言であったが、組織上の問題はないと考えてよいか。

中央博物館長：かつての博物館ネットワーク構想の中で、それぞれ専門性を持った地域館として存在していた当時と比較すると、人員配置や予算措置が十分で無く、また、開館日数が確保出来ていない状況ではあるが、地域と連携を密にした事業展開や本館の資料を活用した企画展の開催など、それぞれの館の特色を出した運営に努めている。

議長：市町村に移譲された博物館についてはどうか。

委員B：館山市に移譲された旧安房博物館(現館山市立博物館分館)の場合、外見的には、水族館が再整備され、また、目隠し的であった長身の外壁を腰壁に改修したことで、外からも建物が良く見え、人目を引くようになった。しかし、県は博物館として移譲

したが、市側は商業施設の性格を備えた観光施設として活用したいようで、それには博物館としての規制がネックとなり、移譲・リニューアルによる施設利用の増進は、あまり進んでいないようだ。根本的な問題は、市側のボタンの掛け違いにあり、市には、博物館本来の機能を重視した活性化策を検討、実行してもらいたいと考えている。

議長：市町村移譲については、この場にいる現代産業科学館も、かつて検討されていたので、実際に移譲された館の状況を確認したかった。情報提供に感謝する。

委員B：現代産業科学館は、先ほどの説明で、スマートフォンを活用した取り組みについて話したが、これは、館の性格にも合った良いアイデアだと感心した。

現代産業科学館長：通信料は利用者負担で、ホームページを見る感覚で利用してもらいたいと考えている。

議長：現代産業科学館のアクションは、時代のニーズにもマッチした取り組みなので、他の県立館にも波及することを期待する。次に、学校教育、社会教育の立場からの意見も聞きたい。

委員C：小学校においては、総合的な学習や生活科の導入に伴い、学校の外に出て学ぶ機会が増えてきた。これには、子供たちが社会と繋がるという目的があり、自然や文化、産業といった事象を学ぶだけではなく、そこに働く人たち自体からも色々なことを学ぶというキャリア教育も重視されている。その点において、県立美術館・博物館では、自然や文化、産業について時代にマッチした多様な企画が実施され、また、そこには、それぞれの専門分野に情熱を持って生き生きと働く学芸員がおり、ありがたい存在である。今年度の協議の中では、機会があれば、「各館の学習支援事業における課題」についても聞きたい。

委員D：各館とも、館の特性、地域性を考え、良く工夫した事業展開を行っていると感じた。また、財政状況が悪い中、その分を手間で補っており、職員の苦勞に敬意を表する。

委員E：各館が年間を通して、多様な、しかも多数の取り組みを実施していることに驚きを感じた。しかし、残念なことに、子供と接している現場の人間としては、多くの子供達に、いま一つそれが伝わっていないと感じる。この点が課題であり、それが少しでも改善できれば、入館者の増加にも結び付くと考える。

議長：広報という点では、マスコミの協力がとても重要である。良好な関係を築き、タイムリーに有益な情報を流してもらえよう、各館とも努力してもらいたい。次に専門家の意見も聞きたい。

委員F：各館の概要、状況については、この場において説明を受けることにより知り得るが、的を射た有益な意見を述べるには、全ての館を実際に自分の目で見てみる必要があると感じており、それが実行できていないことを反省している。各館説明を聞いた感想は、行政機関の一端として入場者数、入場料収入を意識しなくてはならないこともわかるが、それ以前に、博物館は、教育、文化、を支える重要な機関であるのだから、短期的な数値に一喜一憂せず、これまで通り、各館の特性、地域との繋がりを重視した地道で継続的な活動を続けてもらいたい。長い目で見れば、それが県のためにもなり、財政状況が好転すれば、運営費等も上向くのではないかと考える。

委員G：協議会会場については、中央博物館以外では、前回、現代産業科学館が会場と

なった。ぜひ、次回は、他の館で行ってほしい。先ほどスマートフォンの話があったが、県立館におけるツイッターやフェイスブック等の導入は、どのような状況になっているか。博物館のブランド力を向上させるためには、時代のトレンドを取り入れることが極めて有効な手段になると考える。

事務局：ツイッターについては、中央博物館では3月から導入しており、房総のむらでは、現在、導入する方向で検討を進めている。

議長：昨今、ネット環境を活用した様々な媒体が出現し、個々については賛否両論があり、その真価を見定める必要があるだろう。しかし、G委員からの指摘の通り、博物館のブランド力を高める上では、媒体に限らず人物や物も含めて、時代のトレンドを取り入れることは、大きなカギになると考える。既に各館でも検討していると思うが、ぜひ、前向きに進めてほしい。また、委員の一人として、各館を訪れる必要性については、同感である。事務局で検討してもらえれば幸いである。

委員H：東日本大震災以降、どこの館も入場者数の大きな落ち込みがあったが、先ほどの説明では、各館とも、そこからの回復の兆しが見えたと、その陰には、大変な工夫と努力があったことが想像できる。また、本日の議題は、研究成果の周知方法であるが、そのためには、同時に、成果を生み出すための体制についても周知する必要があるのではないかと考える。

議長：各委員、補足意見があるか。

委員F：先ほど話題になった時代のトレンドの導入については、大いに共感するところであるが、それに終始してしまい、これまでの地道な活動が否定や排除されないよう配慮してほしい。博物館における文化の香りとは、双方が両立した上で成り立つと考える。

委員E：予算や人員の問題もあろうが、良い物はどんどん取り入れる、足し算方式で、進めてほしい。

議長：以上で、報告についての質疑を終える。

2 協議事項

(事務局が議題策定の経緯、県立美術館・博物館の調査研究事業の概要について説明し、各館が平成24年度実績に基づいて研究テーマと成果の公表について説明)

議長：各館らの説明について、質疑を受ける。

委員A：本日の議論の主体である「県民」であるが、これは、どの年齢層(ターゲット)に焦点を充てているのか。また、学びの土台を支える調査研究、資料収集活動のテーマについて、これが「県民のための活動である」ということを、県民に、その前に行政に、どの様に理解してもらおうのか。これらは、とても重要で難しいことである。「成果を活かしていく方法」、また「どうすれば博物館が輝いていくか」の議論を行うには、まずこの問題をクリアーにし、認識を共有する必要がある。

議長：もっともな指摘であり、館もしくは、事務局の見解を聞きたい。

事務局：博物館は、社会教育施設であり、その点で、小中学校の様に特定の年齢層を対象とした施設ではない。従って、ここでいう「県民」とは、全ての年齢層を指す「万民」として理解してほしい。但し、すべての館活動がその様な前提のもとに展開

されているのではなく、それぞれの事業毎に、想定するターゲットは存在する。例えば、展示を例に上げると、一般的には、中学生の学力が一つの基準となる。展示の内容には、それ以上の高度な事象がかなり含まれるが、展示を作成する際には、それらを中学生でもわかるレベルの用語や表現を用いて表示するよう心がけている。当然、これでは、見る側にとっては(習熟度、知的レベルの差異により)、満足度に過不足が生じる。この点は、展示品を補う資料等を配置することによって補っている。また、講演会や見学会などの教育普及事業においては、「親子」、「一般」などの様に参加対象を明示し、指定した客層の知的レベルに見合った内容の事業を行うことにより、この問題に対処している。

中央博物館長：A委員の指摘の通り、行政サイドの博物館に対する理解度を高めていくことが極めて重要であると認識している。展示会開催時や予算折衝、マスコミに取り上げられた際など、様々な機会をとらえて博物館活動への理解を深めてもらうことが必要と考えており、各館ともその努力を行っている。また、県民の理解については、館に来て見てもらう、各種行事等に参加してもらう、これに尽き、それには、従来の広報に加えて、より効果的な広報を展開することが、極めて重要と考えている。

委員E：理解、広報という点で、公民館との連携を提案する。公民館はどこの市町村にもあり、行政機関の末端組織として個々に文化事業を実施している。しかし、少ない予算と人員で、事業実施には苦慮しているのが実情である。そこで、各館が展示会等と関連した事業を公民館と連携して行えば、行政サイドとしても博物館への認識が高まり、また入場者の増加にも繋がるのではないか。

議長：本日のテーマである成果の周知という点では、どうか。

委員C：各館からの説明では、周知の最終形態、すなわち媒体が冊子やウェブとなっている事項が多々見られる。しかし、理解を得るという点では、これでは不十分で、この情報を得た者が、その後に、あるいはその後も、館に足を運ぶようにさせる努力と工夫が肝要。担当する学芸員としては、限られた媒体の中では、伝えきれなかった事や思いが多々あるはず。自身も、媒体からの情報を得た後に関連事業に参加し、媒体からは得られなかった情報を得ただけではなく、学芸員の活動自体への理解を深めた経験がある。

委員B：より良い理解をえるためには、成果の周知方法の検討とともに、根本的なところで、成果自体並びに媒体内容の質を問うことも必要ではないか。これは、学芸員の資質と感性によるところが大きい。従って、学芸員は、閉鎖的な環境の中で自画自賛に陥ることなく、積極的に外に目を開き、自らを向上させる努力にも努めてもらいたい。

委員F：学芸員の話になったところで、少し違った切り口で研究についての意見を述べたい。公立博物館に求められる社会的な機能や役割は、管轄する為政者側の意向により、比較的短期間に変化する。これに受け身で対応していたのでは、組織が疲弊するだけでなく、綿々と続けてきた諸活動も崩れてしまう。それを防ぐには、社会情勢の変化に敏感になり、先手を打った対応が行えることや、館の活動について十分説明できる理論の準備をし、本来の目的を損ねるおそれのある要求に対しては自信を持ってそれを跳ね返す力が必要である。そのためには、それを担う学芸員が常に元気である

ことが肝要で、運営者は、学芸員の元気がどうすれば保たれるかということについても考える必要がある。自身の経験から言えば、元気の源は研究活動であり、そのための環境と時間が保証されれば、学芸員は、本日のテーマに限らず、館が直面する諸課題にも前向きに取り組み、より良い博物館、美術館となっていくものと考え。それが、最終的には県民参加による博物館のインフレーション状態につながるだろう。

議長：各館、学芸員についての意見、参考にしてもらいたい。

委員D：調査研究は、博物館の基本機能だと考える。しかし、その成果の公表および効果においては、館側からの押しつけになると受け手には歓迎されず、受け手の学ぼうとする意欲と上手くマッチすると効果的なものとなる。従って、周知の成否は、その形態(展示会／講演会／見学会等)もさることながら、受け手の姿勢(能動的か／受動的か)によって大きく異なる。このため、周知を成功させるためには、受け手を能動的にする必要があり、時には、そのための仕掛けも必要ではないかと考える。例えば、一つの方法として、市町村と連携し、展示会や講演会、見学会などの研究成果を周知する場を、公民館事業や市民カレッジ等の一環として位置づけるのも良いと考える。

委員G：本日のテーマ「研究成果の周知」、このポイントは、「解り易く伝える」ということにあると思う。一般論として「博物館における解り易く」は、「物事を体系的に整理し、論理的に云々」と言うことになろうが、はたしてそれだけで「解り易く伝える」という責務が果たしているであろうか。子供の将来を見据えた教育、あるいは一般市民の知的好奇心を満足させる事を考えた時、私は、この様な形に表せる部分だけではなく、目に見えない観念的な部分にも「解り易く」に資する重要な要素が多々あると思う。それは、研究者自身の生き方や情熱、それを伝える生の声等である。ぜひ、成果の公表と言う際には、単に知識を伝えるだけでなく、併せて、その裏にある研究者の思いや努力等も伝えてもらいたい。部外者にとっては博物館自体が謎多き場所であり、このことは、調査研究だけに留まらず、博物館活動全体についても言えることである。それによって理解も深まる。

委員F：「調査研究」について私の思うところは既に他の委員から出尽くしており、「博物館の新たな役割」について目先を変えた話をしたい。私は少年時代を地方の郡部で過ごした。そこでは、夏の河原や社寺の祭りが異年齢間交流の場であり、その中で、遊びや風習、動植物などの自然、人間関係等、多くのことを年長者から自然と学び、知らず知らずのうちにそれらを若年者に伝えていた。都市化が進んで人間関係も希薄になり、そういった文化や習俗もすたれた現在では、博物館こそ、その場となりうるポテンシャルを有していると考えている。「研究成果の周知」についても、情報発信の工夫とともに、この点に着目すれば、新たな可能性が見いだせるのではないか。

議長：まだ発言していない館長の意見も聞きたい。

房総のむら館長：当館では、地域の歴史と自然を対象とした調査研究を行っている。その成果は企画展示や報告書などで公表してきたが、これからは、それにとどまらずそこから得られた成果や知見に地域の文化資源としての価値を新たに見出し、さらに活用していこうと考えている。

関宿城博物館長：成果をより良く理解してもらうためには、レベルと手法が上手くかみ合うことが重要と考えている。レベルについては、先ほどの話にもあった中学生の学

力を基本として臨機応変に、手法については、複数の媒体(展示／講座／体験等)を組み合わせるにより、より深い理解を導き出していきたい。

現代産業科学館長：これまでの経験から、予算確保の重要性と困難さを痛感している。

入場者数や入場料収入についても数値が全てではないとも思うが、予算交渉を有利に導くために、少しでも向上の可能性がある物についてはその努力をし、館の発展と充実した事業展開に繋げて行きたい。

美術館長：根本的なところでは、魅力のある企画を打ち出せること、これに尽きると思う。それには、職員の努力しかないと考えている。現状では、限られた予算の中で少しでも良い結果を出し、将来につなげて行きたい。

議長：各委員、補足意見があるか。

委員D：改修休館に伴い、美術館が移動美術館事業を充実させたのは、周知という点で、とても良いことだと思う。この機会に地域との連携を深め、再開後の発展に繋げてもらい。

委員E：県の制度等の問題もあろうが、各館の貸出用教材については、販売も考えてはどうか。それにより、有限対応となる貸し出しよりも利用者が広がり、美術館・博物館への理解や認知度の向上にも繋がる。

委員A：行政の博物館に対する無理解は、先方だけの責任ではない。このことを学芸員も良く理解し、個々にしっかりと責任を果たすよう努力してもらいたい。

委員F：人員、予算が十分に確保できない状況下では、「人の権で相撲をとる」ことも重要。研究活動の充実には、外部との連携やボランティアの導入なども積極的に進めてもらいたい。

議長：以上で協議を終える。